

雪との闘いや病院通いの不安などの訴え聞く 市議会中山間地対策特別委員会が吉川、板倉で懇談会開催



情を報告、「昔は36戸あったが、いま、町内会戸数は22戸。そのうち5戸の方がたが移住されてこられた。人口は49人。ほとんどが65歳以上」「何が心配かといえば、(柿崎)病院までのバス代が片道700円もかかることだ。車を持っていない世帯は7世帯ある。高齢化が進み、普請など町内会の義務を果たせない世帯も出てきている。それと、各種負担金が重い。学校後援会費などの負担金総額は1年間で1世帯当たり8866円にもなる」と訴えました。

木戸先までの除雪がたいへんだ

都会から上越市内山間部に移住した人たちの生の声を聴いてみたい。できれば、そこから中山間地域振興のためのヒントを得たい。そんなことから、市議会中山間地対策特別委員会は23日、移住者の人たちが頑張っている吉川区坪野(写真上)と板倉区猿供養寺(写真下)に出かけて懇談会を開催しました。

懇談の中では町内会の参加者から次々と発言が出ました。「県道、市道はまったく問題ないが、そこから木戸先までの除雪が大変だ」「雪が一番多くなったところで除雪機が壊れたがすぐには直してもらえなかった。部品が無いというので、メーカーの本社まで電話をかけた」「いまのデマンドバスは運転側のデマンドであって、利用者側のデマンドとなっていない」「この間の大雨で宅地が滑った。でも災害で拾ってもらえない」「かなしいのは子どもの姿が見えないことだ」「ものをつくる楽しさをアピールすべきだ」などの発言は、特別委員会の今後の議論に役立つものばかりでした。

このうち吉川区坪野では、冒頭、宮崎政国委員長が「中山間地域があるから平場、まち場がある。私たちは3年かけて中山間地域振興基本条例をつくった。まずは柱をつくり、これから枝葉をつくって中山間地域を振興させていきたい。みなさんから、忌憚のない意見を聴かせていただきたい」と挨拶しました。

板倉区猿供養寺での懇談会は午後からでした。宮崎委員長の挨拶の後、猿供養寺の石曾根浩町内会長が、「もう5年、10年経てばどうなるか気にしながら生活している。今回の懇談会を契機によりよい町内会にできれば」と挨拶されました。また、寺野地区連絡協議会の丸山公星会長も挨拶、「ここは黒倉山があり自然

が豊富で、歴史もある。たいへんな豪雪地帯で、最盛期には寺野地区で360戸あったが、いまは160余りになってしまった。山菜まつり、盆祭りなどいろんな取り組みをしているが、若い人からお年寄りまで安心して住めるところにしていきたい」とのべました。

お年寄りが病院に行くには厳しい

議会側との話し合いで賑やかになったのは農地の取得制限。自給自足を希望して移住してきた人たちが少ない面積でも耕作できる仕組みづくりを考えていく点で一致しました。

このほか、参加者からは、「お年寄りが病院へ行くにも厳しくなっているので、手当(支援)していただきたい」「引き受け手がいるかどうかが問題だが、冬期保安要員をここにもぜひ欲しい」「旧寺野小学校の空きスペースの活用を考えられないものか」などの声が寄せられました。

今回の懇談会は市議会が中山間地域振興基本条例を制定して初めての取り組みです。同条例を活かすも殺すも具体的な施策がきちんと打ち出されるかどうかにかかっています。その点から見た時、懇談会はとても有意義でした。



いじらしい2輪の花

先月30日の豪雨災害でハウスや栽培していたコリに大きな被害を受けたOさんのところで、たった2輪だけ花が咲きました。

Oさんは「このままではやっていけない。助けて」と訴えています。

「ポン、ポン」「ポン、ポン」県庁の生協売店で、やってしまいました。大きなスイカが台の上にくつも並んでいたもので、つい、たたいてみたくなったのです。もちろん軽くですが。スイカは「八色西瓜」、いずれも食べごろのいい音がしました。

「いい音するねえ。こりや、食べごろだ」そうつぶやくと、売店の係の女性が「わかるんですか」と私に声をかけてきました。「もちろん、わかりますよ。昔からたたいてきたんだから」と私は答えたのですが、正直言って、もう何年も畑のスイカをポンポンとたたいていません。県庁の売店では、かつて身につけた感覚を確かめるような気持ちでスイカをポンポンとやりました。

言うまでもなくスイカは、夏の食べ物なかでも最高の美味しさを持った食べ物のひとつです。タヌキやハクビシンによる被害がなかったころには、どの農家でも畑につくっていました。

わが家では、八月のお盆前から収穫できるようになり、稲刈りの中間頃までスイカを楽しんだものです。暑い盛りに横井戸で冷やしたスイカを家の中で食べるのも美味しいものでしたが、忘れられないのは田んぼの畦で食べたスイカです。稲刈りの合間とか休憩時間に、祖父や父母が稲刈り鎌でスイカを割り、食べさせてくれました。のどをうるおし、口に中に広がる甘味は文字通り最高でした。

スイカを収穫することを、私たちのところでは「スイカをもぐ」と言います。畑から初めてもいできたスイカは仏壇に上げた後、家族みんなで食べました。その後は、熟したものから順にもいできました。スイカをもいでくるのは、父や母だけではありません。子どもにもまかされることもありました。

スイカには熟した時にもぐ、いわゆる「もぎ時」というのがあります。誰に教わったのか記憶していませんが、玉をつけている枝の付け根が一番近い巻きひげが枯れたかどうか、スイカを軽くたたいた時にいい音がするかどうかがポイントです。私の場合、スイカを手で軽くポンポンとやって熟しているかどうかを確認してきました。実が熟しているスイカは、横腹をたたくと心地よい、軽い響きがあります。一方、まだ熟していないスイカは重い音で、あまり響きませんでした。

畑でつくっていたものはスイカだけではありません。今ごろですと、キュウリ、ナス、カボチャ、マクワ、マクワウリ、トマトといったところでしょうか。いずれも収穫時期というものがありませんから、キュウリなら、実についていた花が枯れる、トマトなら色が赤くなるといった「もぎ時」の知識が必要でした。

憶えたつもりでも適期の判断が難しかったのは、マクワウリでした。まず、実が大きくなくなって黄色くなっていることが大前提です。そして、つると実をつないでいる「つぼ」という部分はずれそうになって、マクワウリ特有のいい香りが出てくる、ここが適期です。ところが、この適期が意外と短かい。もぐのがちよつとでも遅すぎると、甘味は増すものの、実の頭部にひび割れがはじまってしまふのです。

スイカのポンポンという音、マクワウリのぷーんと匂ってくる甘い香りなど「もぎ時」を知ると、実の美味しいところも意識するようになります。先だって、ある人から、マクワウリについて「内緒ですが、種のところが一番おいしい。刺さらないように気をつけながら、筋になっているところをすすりながら食べた」と教えていただきました。そう言われると、スイカも種の周りが一番甘かったような気がします。

自選ミニ随想集『春よ来い』出版

私が書き続けている随想シリーズ「春よ来い」をより多くの人から読んでもらおうと、この度、文化印刷㈱から自選ミニ随想集、『春よ来い』を出版しました。



掲載したのは、「父の『小旅行』」、「手をつなぐ」、「どんぐりの『あてっこ』」、「ばあちゃん料理」、「スマイルカフェ」の5話。わずか16ページですのですぐ読了します。価格は100円です。ご注文は橋爪または「しんぶん赤旗」配達員まで。

各地で福祉祭り開催

上越市社会福祉協議会はいま、板倉区、吉川区など各地で福祉祭りを開いています。

このうち、吉川支所主催の吉川区福祉祭は20日に行われました。記念すべき第1回の祭りです。よしかわほほ笑の里、うぐいすの里、あじさいの里などの福祉

施設を利用している人たち、家族などが参加して歌や踊りなどを楽しみました。

会場では輪投げやスカットボールも行われていました。私も参加しました。輪投げは意外と難しかったですね。5個投げてひっかかったのはわずかに1個でした。スカットボールは、恐る恐るコチンとやったのがよかったようです。こちらは、5個のうち4個も穴に入りました。周りの人たちからは「オーッ」という声が上がりました。



謙信公祭、烽火上げ、各地で賑やかに



顕法寺城址での烽火上げは伝統があって、今回が17回目。20日は、ほどよい天気だったので、柿崎区の小野城、春日山城などの烽火がよく見えました。